

(3) 社会・環境システム史からみたアメニティ の位置づけについて

ON THE ENVIRONMENTAL AMENITY VIEWED FROM HISTORY OF
SOCIO-ENVIRONMENTAL SYSTEMS

中村良夫*

Yoshio NAKAMURA*

ABSTRACT ; The most of environmental problems appeared so far have been reduced into pollution abatement. Although, some tries to harmonize the regional development with environmental deterioration, these scientific solutions seem to have encountered with eventual difficulty of attaining social consensus. This causes from the lack of sociological involvement. Further, most papers might have regrettably failed in taking amenity (spiritual value of environment) into account.

As a first step to find a new paradigm of studies comprizing these three aspects, a classic text concerned with comprehensive managements of socio-environmental systems is put into content analysis to reveal some of its strategic characteristics. These are priority in strategic philosophy, the importance of collective representations, feed-back of strategic chains, linkage and pluri-objectives, and so on.

KEY WORDS ; history of socio-environmental systems, amenity, strategic philosophy, collective representations, collective life style, environmental consumption control

1. はじめに

環境形成に関する従来の研究は、想定される開発プロジェクトの機能的な効用に関する研究、環境インパクトの研究、アメニティ（環境の精神的価値）の達成に関する研究など大別して三分野から成っていると思われる。いうまでもなく、これら三分野ともに、必ずしもプロジェクトに直結しない多様な基礎研究を発生させるのであるが、いずれも上記の三分野を問題発想の原点にしていると考えられる。これら諸分野の研究はこの数十年、開発と環境保護についての激しい論戦の中で著しい進展を見たことは疑いないものの、また同時に、新しい研究の方向を探ろうとする動きが、徐々に表面化してきたことも事実である。

このような新しい模索が試みられるについては研究の現状に関する次のような疑義が生じているためと思われる。

- (1) 限りなく細分化してゆく基礎研究の拠って立つ現実的根拠が見失われがちになること。
- (2) 三分野の間の相互関係を不問にした理論の有効性についての疑問。これについては、さらに言うなら、例えば開発と環境との調和について、
- (3) 環境条件を制約とする開発形式の決定という問題設定の有効性についての疑義。ある社会が暗然に認めている欲望形式を放置しながら、環境基準という首枷で締めつけるというやり方が果して合理

*東京工業大学工学部社会工学科 Department of Social Engineering, Tokyo Institute of Technology

なのかという疑問である。すなわち、開発を前提としてアセスメントを行うという苦しい選択に我々を追い込んでいる発想に対する反省。

これらの課題を問題として取り上げようとするれば、従来の研究の枠組にこだわらない視点を導入することになるであろう。文明の奔流に逆らうこのような企てがきわめて困難であることは誰もが予期しているところであって、容易に新しい研究方向あるいは環境運営の方法が見い出せるとは思えない。なぜなら、それは人間社会と環境との新しい総合様式の設定を求めるからである。そのような様式の発見の困難は、同時にその社会的受容の可否によってさらに審査されねばならないという試練によって増幅されるだろう。

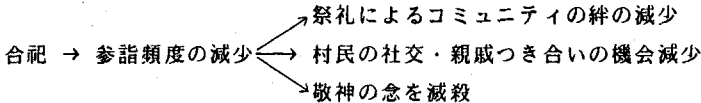
このような問題と状況認識に立つとき、われわれが先ず手始めにやれることといえば、過去において、人間社会と環境との総合様式がいかなるものであったか、できるだけ客観的にその運営と計画を認識し得た事例を集めてみることである。すなわち、社会・環境システム史とでもいうべき研究を開始してみるのも一案であろうと思うのである。このような研究方法が、焦眉の問題解決のための工学的decision making に直結しようとは思わないが、それらを論じるための新しい言葉を生み、大きな見当違いに警鐘を鳴らすことは期待してもよいであろう。

本論文はこのような観点に基づき、南方熊楠が「神社合併反対意見」で示した社会・環境システムの分析の事例を通じて、特に社会・環境システムにおけるアメニティの役割を考察してみたい。

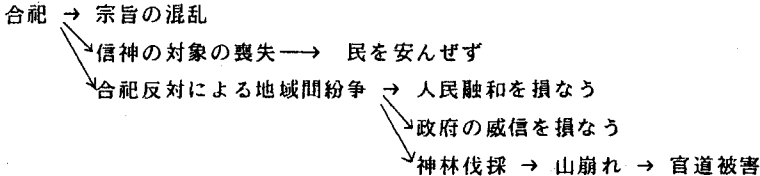
2. 南方（みなかた）テキストの分析

明治39年、財政基盤の弱い神社を廃して、一町村一社を原則と定める神社合祀令は、大字毎に祀られていた由緒ある多くの産土神社の荒廃を招きつつあった。それを防ごうとすれば、無理をして基本財産の積み立てを行う必要があった。敬神の効果を高めようとされたこの政策に反対する趣旨を細かに書き綴った南方の「神社合併反対意見」は、社会・環境システムの複雑精妙なメカニズムを考える上で格好な資料となっている。南方の自在闊達な筆運びは、時に重複も多く脈絡をつかみにくい点もあるので、反対理由として挙げられた7項目それぞれの内容を整理して構造化を試み、次章では、それらをつなぎ合わせて、神社という精妙なアメニティ空間を中心とする、社会・環境システムの全体像を再構築してみようと思う。

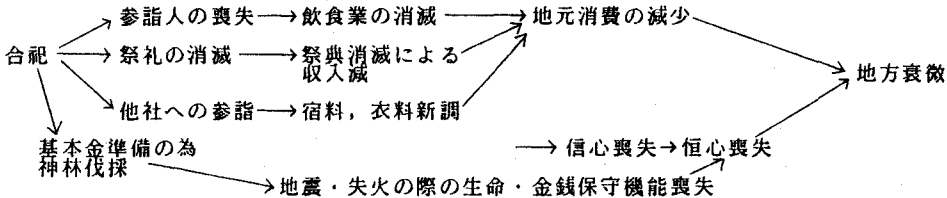
(1) 合祀により敬神思想を高めるとは偽りである。



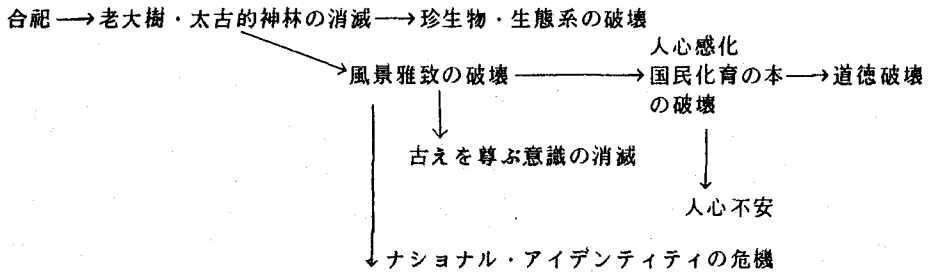
(2) 合祀は人民融和と自治機関の運用を阻害する



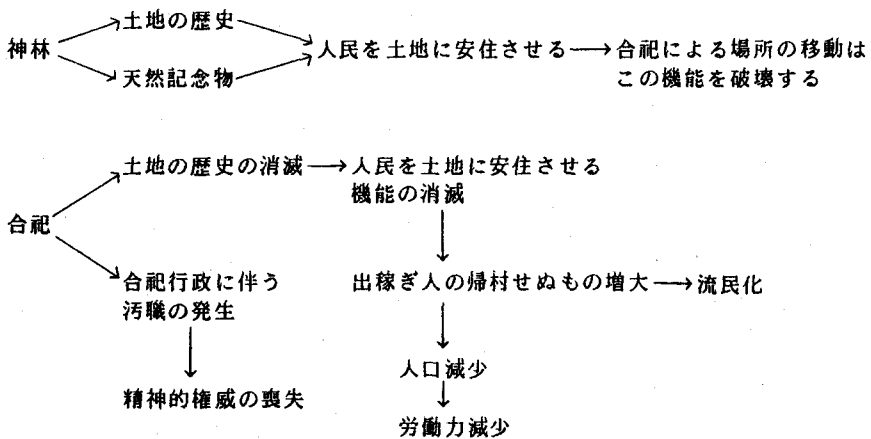
(3) 合祀は地方を衰微せしむ



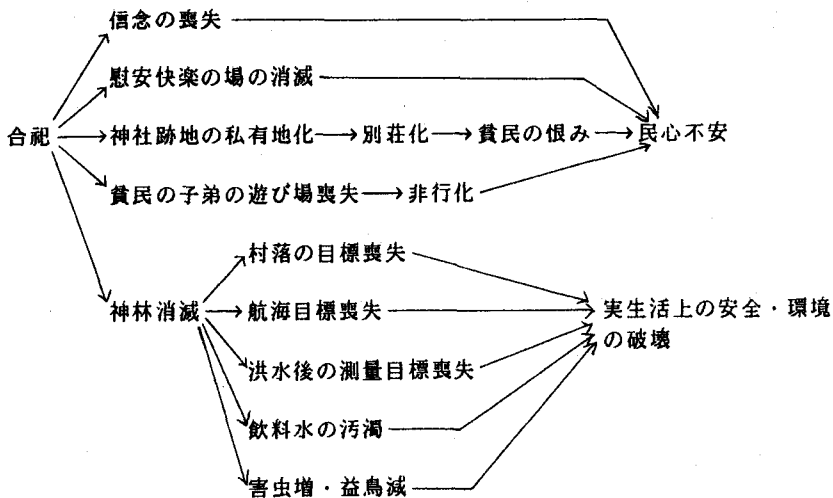
(4) 合祀は庶民の慰安を奪い、人情を薄くし、風俗を乱す



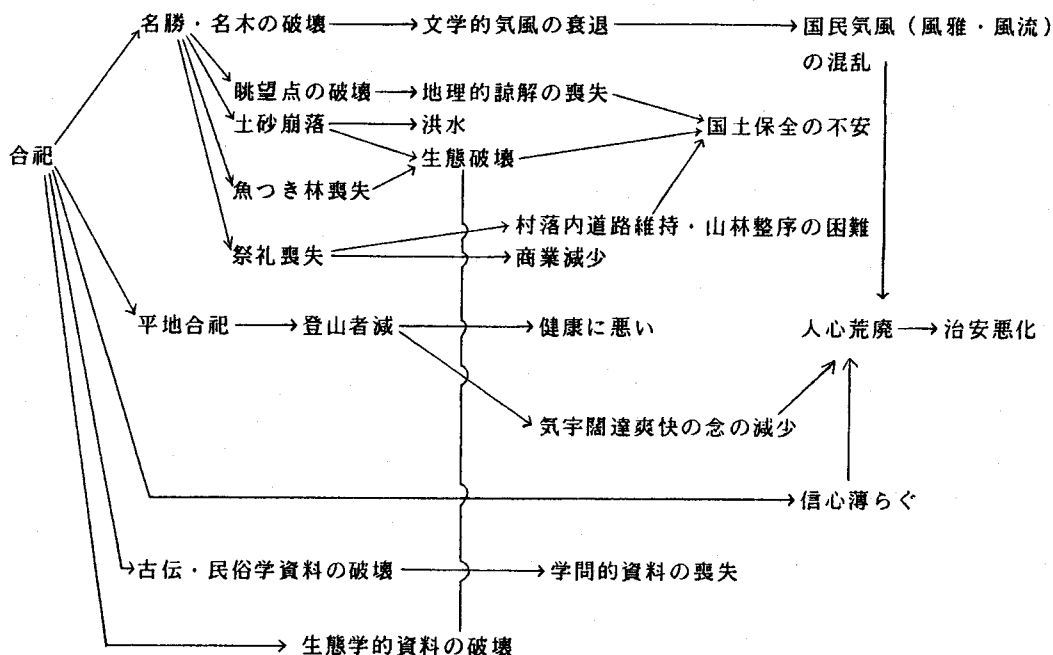
(5) 合祀は愛郷心を損なう



(6) 合祀は土地の治安と利益の大害



(7) 合祀は勝景史跡と古伝を消滅させる



3. システム・モデル化の試み

南方の神社合併反対意見は、明治39年末、原内閣の出した神社合祀令への反対意見として「日本及び日本人」に掲載されたものである。合祀令の趣旨は、古来、大字ごとに祀られていた神社を原則として一町村一社に合祀することによってその財政基盤を強め郷里の信仰心を高めるところにあったとされる。しかしながら、所定の基本財産積み立てのためには、廃社跡地の神林、財産等の売却が行われた。これが、地域の衰退と民心不安に結びつくという南方の洞察が多く、多くの事例を援用しながら展開されたのが意見書である。

意見書に従って、法令を廃止に追い込むため人々を説得する目的で書かれたものであり、南方独特のレトリックと繰り返しの多い文体で決して読み易いものではない。前節においてはそれをあえて読み解いて分かりやすい因果的な図式化を試みたのであるが、それらをさらに総合化した全体モデルの作表を試みる。このとき重要なことは、繰り返しの多い、独特のレトリックの真意を読み取り、全体的な意図をモデルの中に組むことである。

意見書全体を通して南方の主要な関心が、神社の廃止による人心の荒廃とコミュニティの崩壊へと結びつく危険性へ向けられていたことに強い印象を受ける。すなわち南方は神社廃止にともなう環境破壊の諸相を細々と述べながら、全体として神社の果していたコミュニティの平安と民心安定をいかに実現するかという最終目標をしっかりと持っていたと思われる。この目標を達成するための戦略的発想で神社の環境維持機能が諄々と説かれるという構造になっている。

すなわち南方意見書の大きな特徴はこの総合的な戦略性（目的志向）にあるのであって、個別の環境影響分析を全体的戦略構成の流れの中でとらえている。このような解説の視点を導入することによって、前節で抜き出した諸要素を、環境戦略のかなめ、神社空間の諸要素、戦術、戦術目的、戦略目標の五つに大別して、見やすいかたちにモデル化してみた。（図-1参照）

4. 南方（みなかた）モデルの特徴

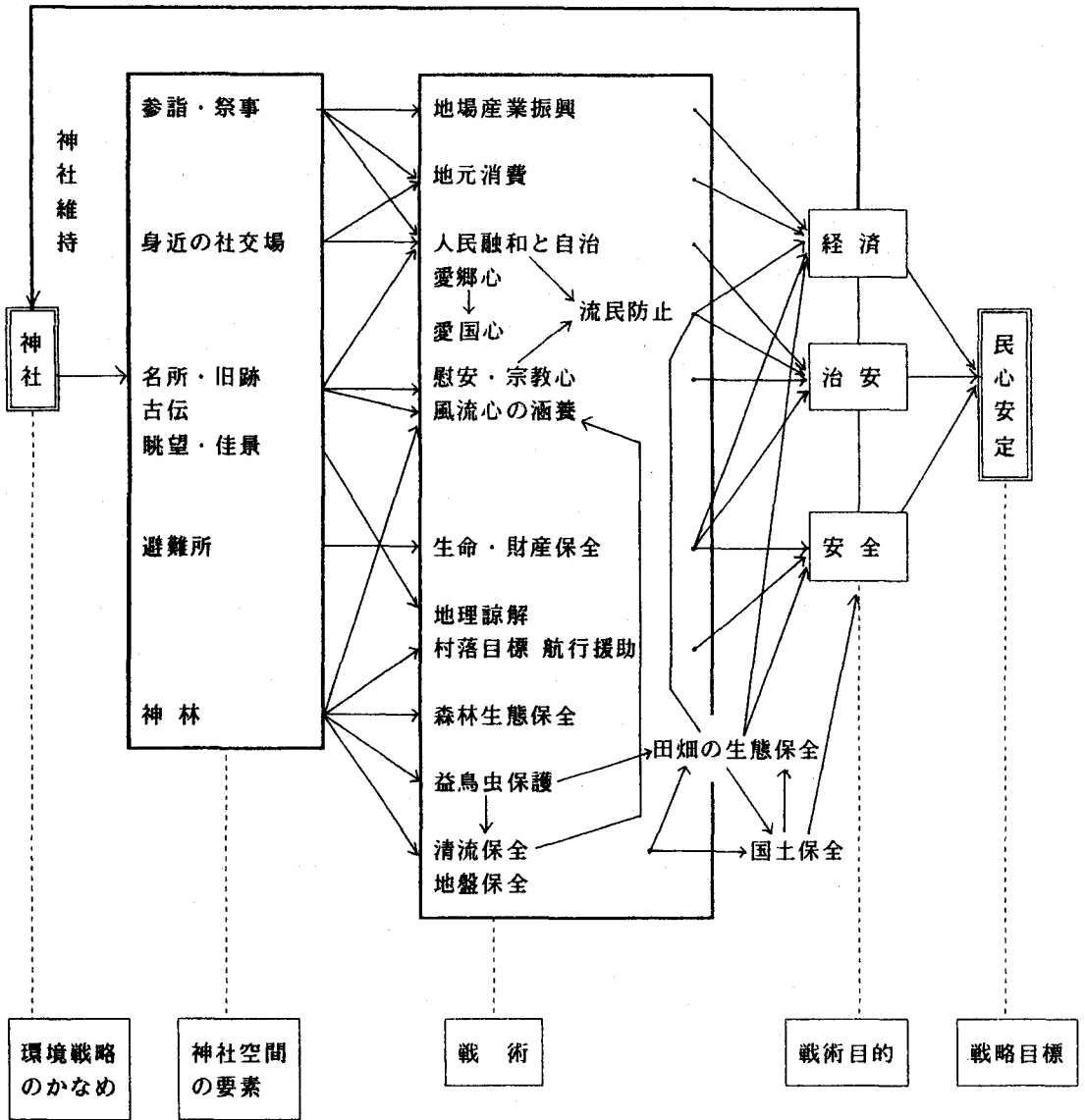


図-1 南方熊楠の地政学的環境戦略モデル

南方「神社合併反対意見」の内容を中村の解釈によりモデル化した。

4.1 戦略性

(A) 地政学的戦略性

南方の意見書にみられる環境論は、因果連鎖の単なる客観的記述ではなくて、目標達成のための手段連鎖という構造であるために、これを前章で戦略性と呼んだのである。しかもこの戦略性は、神社を中心とする環境要素の地理的構造の中で展開される形をとっている。すなわち、隣村への距離、神社の山岳立地が歩行に与える影響、高所からの眺望による地域の視覚的把握、方向感覚への神社の影響、林地の地盤崩壊と河川の水質との関係、等々空間的にきわめて彫りの深い拡がりの中で戦略の網が張られている。この特徴を地政学的戦略性と呼んでおこう。

(B) 戦術の複合性

図-1を参照して気づくことは戦術の複合性である。第一に神社空間の諸要素は複数の戦術に利用される形になっている。第二は、いくつかの戦術は、複数の空間要素によって支援される形となっている。同じ戦術群の中でも流民防止が二つの戦術によって支えられ、清流保全が風流心の涵養を支えるというような相互補強性がみられる。戦術と戦術目的の間にも同様の関係が認められる。すなわち、第一に一つ一つの空間要素や戦術は多目的性を持ち、且つ第二に互いに戦術体系としてのリンケージが認められる。この両者を合わせて戦術の複合性として特徴づけておく。

(C) 戦略の循環性

南方戦略においては神社によるコミュニティの社会的結合の維持機能が重要なモチーフとなっており、これを戦術目的として、経済、治安、安全とまとめてみた。このようにして健全に維持されたコミュニティによって神社の維持運営が保証されるという循環形式になっている。この循環性はテキストでは必ずしも明記はされていないが、流民による労働力の減少が道路、森林などの維持を困難にするという記述(2-(5)、(7)参照)も見られることから、無理のない解釈と思われる。

(D) 戦略の思想性

すでに述べたように南方モデルはコミュニティの絆の維持と、それによる民心の安定という強い倫理性によって貫かれている。これをこの戦略システムの著しい特徴の一つとして再度、数えておきたい。

4.2 戦略の“かなめ”の存在

南方の戦略モデルは、その循環性によって自律的にシステムの自己再組織化をくり返し、戦略の複合性によって頑丈に(robust)構成された倫理性の強いシステムであり、その要(かなめ)を成すのが神林を含む神社というアメニティ空間であることになる。神社の要衝性は上記の三点のいずれから見ても言えることであるが、特に、強く、雅びた集団表象としての神社という存在が「私」を「公」に媒介し、さらに社会システムと環境システムの結合の役割を果たしている点に注目されるべきである。

4.3 集合的ライフスタイル

神社は、説教、講釈、理屈を待たずに人心の感化に大功あり、と南方が強調するように、南方モデルは、目的手段関係のまっしぐらな要素還元論理システムではなくて、豊かな風景の中で繰り広げられる、村びとたちの平安な日々の暮しの絵巻物である。この意味で南方モデルは、人々の安定した“生の姿”、すなわち集合的なライフスタイルと呼ぶ方がよいかもしれない。それは、機能的、断片的に追求される目的合理主義ではなくて、物と心の両世界の安定を型の力によって包括的に達成しようとする形態合理主義のモデルとってよいであろう。

5. おわりに

南方モデルにおいて、神社と神林が社会システムと環境システムの結合の役を果たしている点にあらためて興味を覚える。それが両システムを結合する抽象的な概念装置ではなく、具象的な「場所」である点に問題の鍵があらう。さらにまた、このモデルが環境維持の役を果たしている以上、人々に環境消費の抑制と節度を強めているはずなのだが、それは決して苦痛を伴う抑圧ではない。むしろ人々は、神域の存在を「禁忌」という、いわば日常作法の中の風流(アメニティ)として楽しんでいるようにさえ思われる。

伝統的農村社会で起こりえたこのような幸福なシステムが近代工業社会でそのまま成立するはずはないにせよ、今後の社会・環境システムを論ずる上に、重要な論点を示しているとは言えるだろう。尚、テキストは、鶴見和子著「南方熊楠」(講談社学術文庫)の巻末所収のものを利用した。